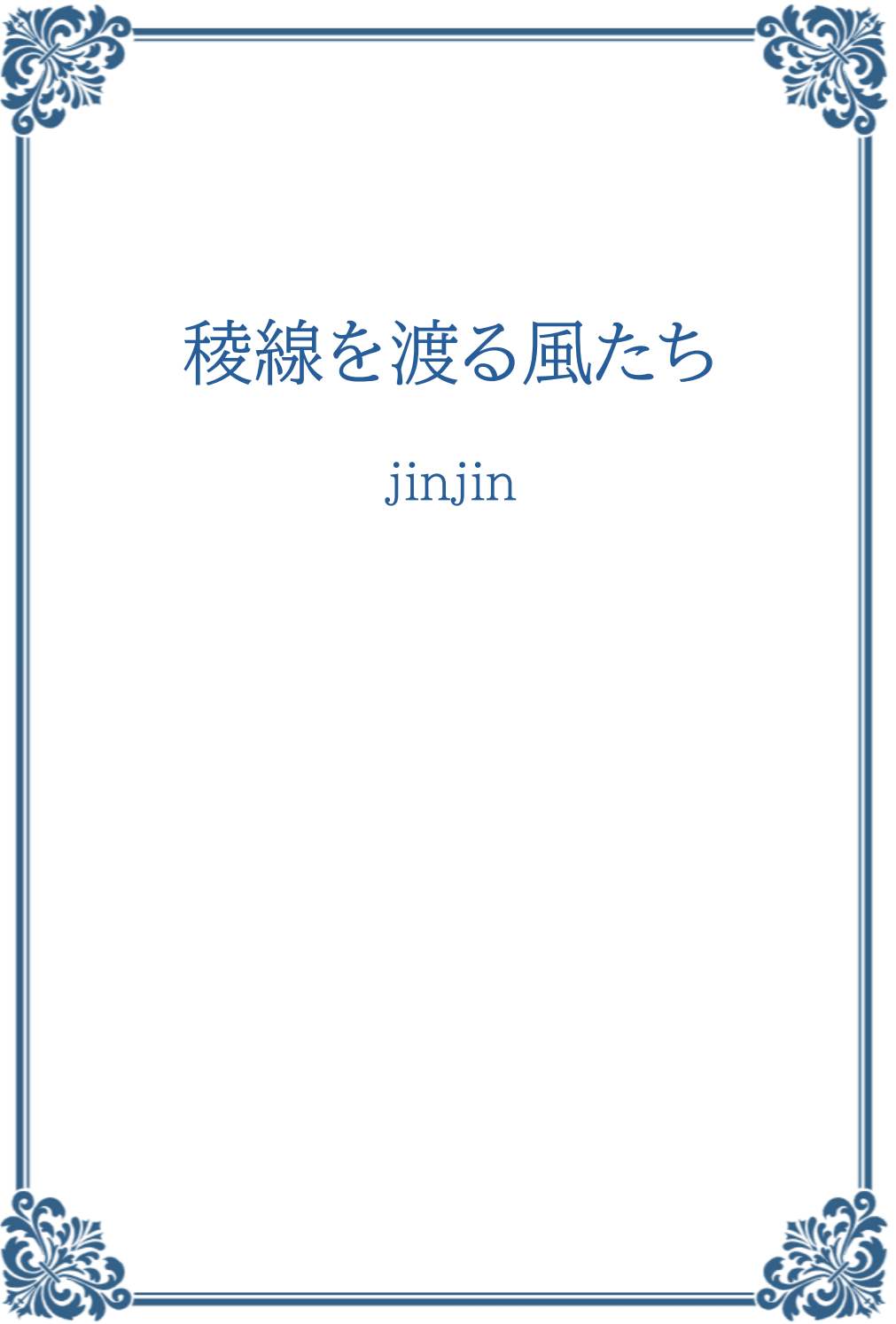




稜線を渡る風たち

jinjin

プロローグ 風の声を聴け

額の汗を拭いながら大きく吸い込んだ薫風は、十年の余、函南を離れていた時間を埋めるには充分だった。小高い日守山から見下ろせる我が家は決して遠くない。この山の暖かさは東北にいた時も忘れなかった。心がしっかりと覚えていた。

懐かしさに目を奪われていると

「引越しの片付けは終わったか？」

背中越しに語りかける幼なじみのノブの声は、何時でも心地よい。

「結構片付けたけど、なかなか終わらないな。随分処分してきたつもりでも捨てきれない品があって、我が家は尚更手狭になったよ」

「そうか、十年ほど前だったか、何時もの居酒屋に急に呼び出された時に、お前が東日本大震災復興の為にエッチャンを置いて単身で東北に向かうと聞いた時には驚かされたよ」

ジンは少しはにcanで、その夜の事を思い出していた。
家族友人に恵まれ何不自由の無かったジンではあったが、何故か大きな虚無感を感じていた。そんな時に日本を揺るがす東日本大震災が発生した。それはあたかも目的を失いかけたような人生を送っていたジンに、世の為に尽くす事を天が啓示したようであった。

函南から東北へ、学生時代から旅を重ね、社会人となってからは山々を駆け巡ってきたジンには東北の地はそれ程遠い地ではなかったが、未曾有の災害に見舞われた東北で勤務する姿を想像するには余りにも困難

であつた。

その復興を目指す東北の地で出会い、幾多もの危険や困難を乗り越え、感動を共有して来た大事な山友、
moro、末吉、HARIBO、やま。

「そろそろ、彼等との約束の地へ行かなくては」

ジンは静かに立ち上がった。

再び彼等と山に向き合う時が来た。

それは、心を整える旅でもあつた。友と風の中で歓喜を聴くための、魂の巡礼だつた。

第一章 再会、上高地にて

梅雨が明けた七月末。上高地バスターミナルは、まだ朝の光を宿した薄青い空気に包まれていた。梓川の流れはどこまでも澄み切り、岳沢の稜線が遠く光を帯びていた。

ジンはザックを背にし、空を仰ぐ。風が稜線を撫でる音が耳の奥に届く。

「よう、ジン。相変わらず山の男って顔してんなあ」

声の主はノブだった。無造作にキャップをかぶり分厚い腕には登山歴が刻まれている。

ジンはサングラス越しに空を仰ぎながら微笑を浮かべた。

「ノブこそ変わらないな。コラボ有難う。頼もしいよ」

しばらくして、moroが現れる。穏やかな笑みを浮かべ、手には手作りのおにぎりの包み。

「朝ごはん、食べてないでしょ？食べないとテン場までは遠いよ」

それに続いて、末吉が愛用のカメラを揺らして近づいて来た。

「腹減ったあ。俺の分も有る？歩きながらも食べるから」

「またねだってるう。末吉」

と、くすりと笑いながら現れた HARIBO は蛍光色のバンダナを巻き、何時もの様に自由な雰囲気纏っている。

「今日の空、なんかね“透明な緊張”って感じがする。なんとなく、分かるでしょ？」

最後に、やまがゆつくりと歩み寄ってきた。凜とした瞳の奥に優しさが宿る。

「いい天気ね。きつと、いい山旅になるよね」

一人ひとりの顔が風景の中で光を放っていた。

ジンは一歩、前に出た。

「さあ、行こうか」

「おーっ！」

と、ノブが大きな声を挙げ、

続いて HARIBO が

「今日も元気だ、登山日和ー！」

と大声で叫ぶ。

みんなの笑い声が風に乗って流れていった。六人の物語がここから始まる。

静かに、確かに。

目指すはあの空を突き刺すように聳える——槍ヶ岳。

第二章 静寂の森をゆく、上高地から横尾へ

明神を過ぎ、徳沢を越え、森が深さを増し、登山道を進むにつれ風の匂いが変わった。湿った緑の香りから岩と氷を孕んだ涼やかな気配へ。

道中ジンは何度も仲間の足取りに目をやる。

mofo は余裕を保ち、荷を担いだ肩がぶれない。

末吉は愛用のカメラを通して風景を見つめ続け、被写体を探す。

「ここ、いい。いい構図っすよ。光が生きている。この時間好きなんだよなあ」

そう言っただけシャッターを切る表情は少年のようだった。

HARIBO はふと立ち止まり空を指差す。

「ねえ見て、雲が遠くから集まっている。山が呼んでいるのかも」

やまはその言葉を受け止めるように微笑み声を和らげた

「きっと私たちのことを待っているのよ。光が丸くなって柔らかくなって、音も丸くなるみたい」

ジンは思った。この登山はただ頂きを目指す旅じゃない。

それぞれの心に残る震災とその後の歳月に対する答え合わせのような時間なのだと。それを探しにきた。いや、仲間と共に見つけたいと思った。

小さな笑いと大きな希望が、森の道にぽつぽつと落ちていき、やがて木立が開けた。視界の先に、穂高の山影が姿を現す。

やがて横尾のキャンプ場が見えてくる

「……おかえり、って感じだな」

ジンが呟いた。

「なんか、山が迎えてくれているみたい」

morog がしっかりと頷いた。

「でもここからが、本番でしょ」

やまがザックのストラップを引き締める。視線は前へ。険しい東鎌尾根が、その先に待っている。

横尾キャンプ場にたどり着いたのは日が傾きかけた頃だった。青い空にモルゲンロートの気配が忍び寄り

雪溪の残る斜面に風が吹き渡る。テン場の隅に六人で張ったテントが小さな島のように浮かんでいた。

設営を終えた頃、morog が温かな味噌汁の匂いを漂わせながら呼びかけた。

「できたよ。今夜は野菜たっぷり、豚汁風煮込み」

末吉が歓声を上げる。

「美味しそう、神かよ！山ディナーの神、morog！」

笑い声が夜の斜面に溶けていく。

やまとHARBが肉を炒め出す。

ノブは静かに各自の水を確認して回る。ジンはその光景を見ながら一人テントの外に座った。

空には星が瞬き始めていた。耳を澄ませば風がカールを撫でる音。静かに夏の大三角形が天の川に沿って輝いていた。

「明日、あの空に向かう」

小さく誰にも聞こえない声で呟いた。

第三章 東鎌尾根、試される心

朝五時。月が沈み、星が名残惜しそうに煌めく空の下、横尾キャンプ場の空はまだ淡く、森の向こうの空がゆっくりと赤く染まっていた。

気温は十度を切る。靴紐をギュツと締め直し重いザックを背負った六人は、静かに列を組んで進み始めた。まずは槍沢を辿り、殺生ヒュッテへの分岐を越える。次第に風が強まり踏みしめる岩が音を立てる。息遣いが荒くなり、ザックが揺れ、そして目の前の幾つも断崖を超える。その先、尾根に取りつくと、空気が一変した。

「うわ……やばあ急っ」

HARIBO の声が、思わず漏れた。東鎌尾根——それは、試練の登りだった。ガレた斜面。木の根が複雑に絡み、岩と泥が交互に足元を乱す。

「ステップ、よく見る。一歩間違えると足持ってかれる」

ジンが後方に声を飛ばす。徐々に息は浅く、額にうっすら汗が滲んでくる。

「ジン、チョイ後ろ、moroのペースが落ちている」

ノブが小声で伝えた。

ジンはすぐ振り返り、立ち止まる。

「moro、大丈夫か？」

「うん……でも、ちょっと……膝が笑っているかも」

moroは申し訳なさそうに微笑んだが、肩が上下に激しく揺れていた。

「少し、荷物を軽くしなくちゃ」

やまが即座に動いた。moroの荷を半分抜き取り、自分のザックへ詰め込む。

「やま、助かる……ありがと」

moroの目に、少し涙が浮かんでいた。

「そんな顔しないの。山では助け合いが基本でしょ」

やまはきっぱり言って、前に向き直った。

そのやり取りを、少し離れていた末吉が微笑ましく見ていた。

登攀はさらに厳しさを増していった。鎖場、ナイフリッジ、苔で滑りやすい細尾根。

「わたし、ここ、ムリかも……」

HARIBOの声が震えた。痩せたリッジ、右も左も断崖。手も足もすくむ。

ジンがすぐに前方から戻ってきた。

「大丈夫。手、手だ。俺の手を掴め。ゆっくり、足はここに置ける」

「ジン……」

HARIBOの手は冷たく、汗ばんでいた。

「怖いのは当たり前だ。でも、信じてくれ。俺は、全員で登りきるって決めている」

一瞬の沈黙ののち、HARIBOはふっと息を吐いた。そしてジンの手を握りしめ、一步を踏み出した。ノブが後ろから支え、やまがザックの傾きを直す。

こうして、一步ずつ。仲間の声、手の温もり、それが彼らを岩の尾根の先へと導いていった。

数時間後――。

「……見えた！ 槍の穂先……！」

末吉の声が、割れるように響いた。

遠く、空を突くように槍ヶ岳がそびえている。尖ったその姿は、まるで天に祈る指のようだった

「よし。もう少しでヒュッテだ。休憩して、頂上を目指そう」

ジンの声に、疲れきった仲間たちが、頷いた。

「こええけど、……この景色、ワクワクするな」

ノブが言い、

HARIBOが

「わたしは、もう泣いている」と笑った。

ジンは、皆の表情を見つめた。苦しさも、弱さも、情けなさも、全部、抱えて。それでも、僕らは登る。それは、山を愛し、畏敬する人達だから。

第四章 祈りの槍ヶ岳 天を衝く頂

午前十時。

槍ヶ岳山荘に到着した一行を出迎えたのは、強い風と、剥き出しの岩肌だった。標高3000メートルを超えた。空気は薄く、吸った息の量が足りない。全員の顔が少しずつ紅潮し、言葉数が減っていく。

「気圧が……ぐっと下がったな」

ジンが空を見上げた。晴れてはいるが、雲の流れが早い。西からの強風が吹きつけ、体が煽られそうになる。

「これ、登れるのかよ……」

末吉が見上げた先には天を衝くようにそびえる槍ヶ岳の穂先。

梯子、鎖、そしてむき出しの岩。高度感。切れ落ちる斜面。誰もが足を止めた。

ジンが口を開いた。彼の声には、情熱ではなく、冷徹な現実がにじんでいた。

「風速……体感で十五メートルは超えてるな。凍傷リスクもある。しかも一人でも恐怖で固まれば、事故になる」

moroが、ハアハアと息を整えながら頷いた。

「たしかに、ちょっと……頭がぼんやりする。酸素薄い」

「高山病、軽度かもな。moro、無理はしないで。脈とってみろ」

HARIBOがすぐに脈拍を取り始める。moroの額には冷や汗がにじんでいた。

「……わたし、登りたい。登れるかどうかは自分で決めたい……」

moro の声はかすれていたが、まっすぐ見据えていた。

「わかった。でも慎重にいく。スリングとカラビナ用意して。万一、ハーネスがなくても補助できるように」

ジンが即座に判断を下すと、ノブが頷いて支度を始めた。

「よし、行くぞ。ヘルメット装着。間隔を空けすぎるな。声は通らないかもしれないが、目線で指示する」

そして——登攀が始まった。風は容赦なかった。

梯子の一段一段に、手をかけるたび、金属の冷たさが手袋を貫いた。岩の上に立てば、背後から突き飛ばされるような突風が吹く

「怖い……足が……震える……!」

HARIBO の声が、岩壁に吸い込まれる。手が離れそうになる。

ジンが体をねじ込み、片手を差し出す。

「HARIBO、足の位置、そこじゃない。左。俺の声聞け。呼吸、整えろ、いいな」

HARIBO の目に涙が浮かぶ。けれど、彼女は言った。

「……わたし、行く。絶対に行く。震えても、怖くても。ジンがいるから……信じてる」

「俺も信じてる」

ジンが笑った。その声は風の中でも、まっすぐ届いた。

一段一段、岩と鉄をよじ登る。

足の置き場は、狭く不安定。ザックが後ろに引かれれば、バランスはすぐに崩れる。ノブが全体の列のバランスを見ながら声を出す。

「中段、間隔詰めすぎるな！ 落石、誘発するぞ！」

風が吠え、雲が巻き上がる。

その瞬間、ジンはふと目を細めた。槍の穂先——もう数メートルだ。最後の鉄梯子を登りきったとき、世界が静止したようだった。あたりに一瞬の沈黙が訪れる。会話も交わすことも憚れる。満ち溢れんばかりの心の躍動が止まることは無かった。

目の前に穂高連峰の全てを見下ろしていた。

南に槍穂高の稜線、西に笠ヶ岳、遠くには乗鞍、そして御嶽が霞んでいる。無限に広がる雲海と稜線。どこまでも高く、どこまでも青かった。

風が静かだった。

ノブが無言のままジンの肩を叩く。

「……来たな、俺たち……」

感動屋の moto が一筋の涙を流しながら小さな声で言う。

「……生きて、ここに立ってるって、凄いことなんだよね」

末吉はカメラで撮るのでは無く大きな目を見開き

「登ったああああ。山って、怖いけど……なんかあったかいな……」

HARIBO が誰に告げる訳ではなく言った。

「みんなと来れて、ほんとよかった……ありがとう」

「すごい、すごいよ！空が近いって、本当だったんだ！」

やまは静かに目を閉じて祈るように景色を抱きしめ一言

「来たんだ」と呟く。

そしてジンが言った。

「震災のあと、ずっと空を見てた。人の命は壊れるけど想いは残る。ここに来て思ったよ。それでも誰かが
思いを繋げ、人は生きて登るんだって」

言葉は静かだったが六人の胸に深く刻まれた。ジンの声は風に溶けた。空はどこまでも青かった。

ノブはジンの隣でつぶやいた。

「なあジン、お前……ここに来たかった理由、見つかったか？」

ジンは何も言わなかった。

けれどその顔に浮かんでいたのは、これまで見せたことのない表情だった。

静かで、深く、どこか満たされたような微笑み。あの空も、山も、震災も……すべては、ここにつながって
いたんだ。

風が吹いた。

槍ヶ岳の頂に立つ六人の影が北アルプスの空へと伸びていった。

第五章 大キレット、静寂なる断崖

登頂の余韻を残したまま、次なる夢の地へ辿り着く為に槍ヶ岳山頂を後にする。

「降りのほうが怖いな……」

末吉がそつと呟く。

「気を緩めずに行こう。大概怪我をするときは下山の時だ。ここで怪我したならば笑いでは済まないぞ。」
ノブが前を見据えたままと言う。

鎖場の斜面を慎重に降り槍ヶ岳山荘にザックを取り戻しに戻ると、やっと生きた心地が体中に溢れてきた。
一同は休む間もなく再び歩き出す。目指すは南岳、そしてその先にある大キレット。

まず現れたのは大喰岳。振り返ればさっきまで心を奮わせていた槍の穂先が小さく見える。

「もうあそこにいたなんて信じられないね」

HARIBO が笑った。

「ね。夢みたいだよ」

morio も息を整えながら答える。稜線の風が冷たさを増して行く。

やまが地図を広げて確認する。

「このままのペースを保てば南岳小屋には昼前には到着するはず」

「飯が待っていると思うと頑張れるな」

ノブが元気づけるように言った。

昼前、南岳小屋に到着。風よけで小屋の陰で昼食を取りながら、ジンは天気図と雲の流れをじっと見てい

た。

「午後からガスが出るかもしれない」

南岳小屋のテラスから望む大キレットは、まるで巨大な断層のように口を開けていた。

東側は奈落のごとく落ち、遠くに北穂の尖峰が煙のように揺れている。風が巻き、すでに空は秋の色を帯びていた。

「……ジン、あそこ、登山道って言えるのか？」

ノブが声を潜めて言った。

ジンは無言で地図をたたみ、目を細めてルートをなぞる。

足元から垂直に近いガレ場が始まり、その先に連なる痩せ尾根と岩塔。

その先には核心となる、長谷川ピーク。

「いいかみんな。ここは大キレットだ。“通る”んじゃない。“渡る”んだ」

ジンの声が、風に乗ってみんなの耳に届く。

「今から行くのは、ただの縦走じゃない。誰かが一瞬迷えば、全員が危うい。ここから先は、完全に“命”のやりとりになる」

緊張が一気に走った。やまが無言でロープを出し、moroとHARIBOのザックに補助スリングを取り付ける。

末吉はカメラを完全にザックにしまい、バンジーコードで嚴重に固定した。

「出発する。声が届かない場面が多くなる。意思伝達は“目”でやる」

ジンがヘルメットを深くかぶり、ノブがシンガリを確保した。

下降が始まる。

最初のガレ場で、すぐに脚が試される。浮石、急斜、濡れた岩。ステップを誤れば、横転しながら谷底へ吸い込まれる。

「ロープを使うぞ！」

ジンが叫ぶ。即座にやまが支点を取り、mororoを先に下ろす。

「ジン……足が震える。……でも、降りなきゃいけないんだよね」

mororoの声が微かに震える。

「震えてるなら、それでいい。命を守るのは、恐怖を知ってる足だ。山は何時だって油断した奴から飲み込んでいく」

ジンの言葉に、mororoがしがみつくようにロープを掴み、下降を始めた。

午後四時。

核心部、長谷川ピークに到達。

右は切れ落ちた絶壁、左は鋭利な岩の牙。手をかける岩は風で揺れ、浮石と化す。

「……見なきゃよかった」

HARIBOがつぶやく。目の前には幅三十センチにも満たないナイフリッジ。足元は空。手は壁に添えるしかない。

「怖い……ジン、どうすれば……」

ジンは立ち止まり、振り返った。

「HARIBO、聞こえるな。一度目を閉じろ、一つずつ、俺の言う通りにやれ」

「目……閉じるの……ここぞ？……こんなところで？」

「そうだ。見なくていい。山の形を目で捉えるな。俺の声だけを掴め。そして深呼吸だ」

一瞬の沈黙。HARIBOは目を閉じた。自分の吐く息を感じた。

「よし、落ち着いてきたな。ゆっくり目を開けろ。心配ない。左足を、岩の出っ張りへ。……そう。右手

は、胸の高さ。そこに凹みがある。……岩だけを見ればいい、感じろ。風の揺れは、俺が見極める」 風が吹

くたび、彼女の前髪が揺れた。

やまが後ろで、息を殺して熱い視線で見守っていた。

「一歩、出せ。信じろ。信じろ……！俺が、絶対に、落とさない」

HARIBOの心が足が動いた。一歩、また一歩。

彼女はリッジを渡った。それを見ていたやまの瞳から、涙がひと筋こぼれた。

その後も、ハシゴ、トラバース、落石の多いザレ場が容赦なく続いた。

岩に手をかけるたび、爪が割れる。足を滑らせれば、岩角が膝を裂く。

「やばあ、脚、つつた……！」

moroが叫ぶ。斜面の中腹、足がつり、動けない。

「ノブ、moroに手を貸せ！ 末吉、スリング回せ！」

ジンの指示が飛ぶ。瞬時に体制が整う。

「moro……深呼吸しろ。体を一度ゆるめて、俺のカウントで動け」

「わ、わかった……ジン、怖い……正直、マジで……もうムリかも……」

「ムリって言葉、ここじゃ通じねえ」

ジンの声が低く、そして熱かった。

「お前は、ここまで来た。お前なら、行ける。俺が“まだ登れる”って思ってる限り、お前は登れるんだよ。絶対に行けるんだよ」

その言葉に、moroの脚が再び動き出した。

午後五時半。

北穂の稜線へ、光が射した。夕陽。涸沢岳の稜線が赤く染まり始める。

「抜けた……の?……」

やまが、地面に膝をついた。

「やっと、登山“らしい”地面だ……」

HARIBOが泣き笑いをした。

「……生てる。生きて帰ってきた」

moroが呟いたその一言が、誰の胸にも深く刺さった。末吉は地面に大きく寝転がり、大空を見上げ大地の有難みを噛み締める。

「ジン……俺たち、オマエの言葉で生きてるよ」

ノブがぼつりと呟いた。

ジンは風の中に立ち尽くしていた。汗と、傷と、粉塵と、涸れた声が、決意の塊のようだ。「……全員、よくやった。これが“大キレット”。そしてこれが絆だ。誇れる仲間だ」

第六章 涸沢、癒しの夜

午後六時過ぎ。

薄闇のなか、涸沢のテン場が視界に広がった。

秋が色づく涸沢カール。赤と黄に染まったナナカマドの葉が、ひらりと一枚、風に舞っている。

「……やっと、下ってこれたんだな」

ノブがつぶやいた。

誰も声を上げなかった。足は棒のようになり、肩は焼けるように重かった。水を飲むのさえ面倒に思える。それでも、六人は無言のうちにテントを張りはじめた。

夜が来た。テン場の灯りはまばらだった。標高2300メートル。空気はひんやりとして、静寂が地面から湧き上がるようだった。

ジンがランタンに火を灯すと、moroが湯を沸かし始めた。

「今日のご褒美……みんなの好きなやつ、全部入れちゃうから」

鍋に、乾燥野菜とベーコン、じゃがいも、にんにく、コンソメ、そしてやまのザックから出てきたチーズ。

「うお、めっちゃいい匂いする……」

末吉が感極まって、ぐらりと倒れそうになった。

「ちょっと待って。お箸ぐらい自分で取って」

やまが苦笑しながら差し出す。

「……うまい」

ノブが一口啜った瞬間、ぽつりとつぶやいた。

「やばい、涙で塩気がちようどいい……」

HARIBO が箸を止めて、ぽろぽろと泣いた。

「ジン……今日、ほんとにありがとう」

moro が向かいに座るジンに言った。

ジンは黙って湯気を見つめていた。

あのリッジの恐怖、あの判断の重み、仲間の命を預かった緊張。それらすべてを、言葉に変えるにはまだ早かった。

「おれ……たぶん今日、山が怖いって、心から思った」

末吉がカップを両手で持ちながら言った。

「けど、それでも山は好きだと思った。怖いけど、見たことない自分に出会えるっていうか」

「うん。……山って、人を試すけど、人を繋げるんだね」

moro がぽつりと言った。

「それにさ……ジンの“信じる”って言葉、なんかね、ずっと残ってる。今も心に響いてる」

HARIBO が笑いながら言った

「あれ、魔法の呪文みたいだったよ」

「……信じるって、実は一番難しい」

ジンが初めて口を開いた。

「でも、誰かを信じるって、未来を託すってことだ。俺は、皆の先に立った。それは、全員が俺と一緒に“明日”を信じてたってこと。俺は勇気を振り絞り、あらゆる困難を想定して、しかし冷静にその時々を見つめているだけだった」

やがて静寂。

そして、風がテントの外をふわりと撫でていく。食事を終えたあと、全員が空を見上げた。

空は満天の星だった。北アルプスの山々が黒いシルエツトとなり、夜空を押し上げている。

「……ここに来て、良かった」

やまが静かに言った。

「大キレット、絶対もう歩きたくないけど、でも……また山に来たいって思ってる自分がある」

「山って、罪なやつだな」

ノブが笑った。

「……でも、明日も歩くんだよね」

HARIBO が小声で笑いながらポツリとつぶやく。

「明日は、湊沢からパノラマコースを下って、上高地へ」

ジンが言う。

「ラストだな」

末吉が空を見上げて呟いた。 “ 終わり ” を意識することではか、見えてこない “ 今 ” がある。湊沢の夜は、そのすべてを優しく包み込んでいた。

最終章 別れ、そしてそれぞれの誓い

上高地、午後二時過ぎ。

六人の影が、河童橋のたもとに並んでいた。青空が広がり、清流が静かに流れている。観光客のざわめきが湧く世界に、彼らの靴音だけが異質なほど静かだった。

「ああ……町の匂いがする」

HARIBO が呟いた。ふと見ると、彼女の目が赤くなっていた。

「うん……なんか、すぐ “ 現実 ” に戻らないといけなの、ちょっと怖い。そして寂しい」
moro がうつむく。

ノブがザックをゆつくりと下ろし、背伸びをして言った。

「このザックの重さ、慣れちゃったな。……置くと、背中に穴が空いたみたいだ」
やまは黙ったまま立っていたが、肩のあたりが微かに震えていた。

そして、ジンが言った。

「……ここに、俺は残る。もう一晩、山に居たい」

その言葉に、静かにざわめきが走った。

「ジン……帰らないのか？」

ノブが問う。驚きというより、何かを悟ったように。

ジンは一度、空を仰いだ。そして、ゆっくりと言葉を選んだ。

「みんなが一歩ずつ乗り越えていく姿を見て……この旅は、たぶん“登山”だけじゃなかったんだと思った。それぞれの人生の、ある時間を共にしたっていうか——だから、俺はその“終わり”を、ここでしっかり見送りたい」

mofo の目から、ぽろつと涙がこぼれた。

「……わたし、あの稜線の風、忘れない。ジンの言葉がなかったら、たぶん、わたし……あそこ、動けなかったよ」

「俺もだ。ジンが先にいるからって、それだけで安心だった」

ノブの声も少しだけかすれていた。

「信じろ、って言葉……正直、あんなに効くとは思ってなかった。あれ、魔法じゃなくて……本気だったんだよね」

HARIBO が少しだけ笑って言った。

「写真なんか、撮れなかったよ。みんなの“今”が強すぎて、レンズの向こうに収まらなかった」
末吉が言った。

やまが、ジンの方へ歩み寄った。

「ジン。……あんたの背中、ずっと見てた。すごく遠くにいても、いつもちゃんと、わたしたちの方を向いてた」

ジンは、小さく頷いた。そして、言葉を噛みしめるように言った。

「ありがとう。……お前らと歩いて、本当によかった。この道は、二度と“同じかたち”では歩けない。けど、どこかで、また“並んで歩ける日”を信じてる」

そして、ひとりずつ、別れが始まった。

HARIBOは「ジン、次はジャンダルム行く？それともエベレスト？」何時もの彼女に戻っていた。
moroは泣きながらちぎれんばかりの力でジンの手を両手で握った。

末吉は肩を叩き、カメラを掲げ

「みんなの姿、俺の誇りだ」と語った。

やまは無言で、熱い眼差しでジンを見つめるだけだった。

最後にノブが言った。

「……お前がいなきや、俺ら、ここまで来れなかった。ありがとうな、ジン。……本当に」

ジンは、深く、深く頷いた。みんながそれぞれ、ジンに背を向け、歩き出す。ゆっくり。ゆっくり。

山を制覇した飲みであつたはずであり、心は満たされたはずなのに何処か重い足取りであつた。

ジンは、ずっとその背中を見送っていた。

彼らの足音が聞こえなくなるまで、立ち尽くしていた。風が吹いた。涸沢の方角から。高く、鋭く、澄んだ

空気を乗せて。

——これで終わりじゃない。

この“別れ”は、“旅が続いている証”だ。ジンは帽子を取り、空を見上げた。

「……また、登ろうな」

その言葉は誰にも届かなくても、しっかりと胸に響いていた。

ジンは穂高の方へ向き直った。静かに、しかし確かに、山へと続く一步を踏み出した。それは、情熱という名の炎を内に宿したままの、歩みだった。

エピローグ 山の続きは、僕らの中にある

涸沢から戻ったあの夏の日々から季節は移り、山は白く、街はまたそれぞれの生活を始めていた。けれど、あの山の記憶は、誰ひとりとして終わっていないかった。

ノブは言う。

「オレはまだ、ジンの背中を忘れちゃいない。あの急登で、何度も心が折れそうになったけど、“行け”って言われるより、“信じろ”って言葉が、何より力になったんだ」

moro は笑う。

「料理しているとき、ふと思い出すの。みんなで食べたあのカレーの味。疲れて、冷えて、でも一口目で

“うまつ！”って声が重なった瞬間。あれが、私の宝物」

末吉は語る。

「ファインダー越しに見た、ジンの肩越しの稜線。ノブがみんなを励ます姿。monoが歯を食いしばって岩を掴んでいる顔。HARIBOが空を見上げていた顔。やまがザックの重みに眉をしかめて、それでも一歩踏み出す姿。あれ全部、シャッターより深く、心に焼きついている」

HARIBOは、そつと筆を握る。

「あれから絵を描くようになって思ったんだ。山ってね、何処に登ったじゃないんだよ。“誰と登ったか”が、そのまま色になる。大キレットの影は怖かった。でも、そこに立つ私たちの姿は、ちゃんと光だった」

やまは静かに言う。

「私ね、怖かったの。あの細い稜線で、置いてかれたらどうしようって。でもみんなが振り返ってくれた。“来ているか？”って。あの一言が、何より嬉しかった」

そして、ジンはただ、空を見上げる。

「みんなのおかげで、あの山を越えられた。俺が誰かを引っ張ったわけじゃない。一緒にいたから、一緒に歩けた。それだけだ。……でも、それがすべてだったんだと思う」

彼らの思いは、声にせずとも、稜線のようにつながっていた。

地図には残らない、でも確かに存在する“道”だった。また会えるかは、誰にもわからない。でも、きつと、またどこかの山で笑い合える気がする。

同じ空の下を歩いている限り。山の続きは、もう地図の上にはない。それは、僕らの心の中にある。それぞれが、あのとときの“心の一步”を持ち帰って、生きている限り。

ジンは歩き出す。

どこかで、また誰かの声が聞こえる気がして。

「大丈夫、一步踏み出そう。一緒に」
そんな風に。

—— 完 ——

りょうせん わた かぜ
稜線を渡る風たち

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ジンジン
jinjin

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

ジンは東日本大震災復興
に身を費やした時に知り合
った山友との約束を果たす
べく幼馴染と六人で槍ヶ
岳、大キレットを目指す。
山は過酷で全員が心を合わ
せ励ましあうことで登頂を
果たす。登山により更に友
情を深めた小説。

